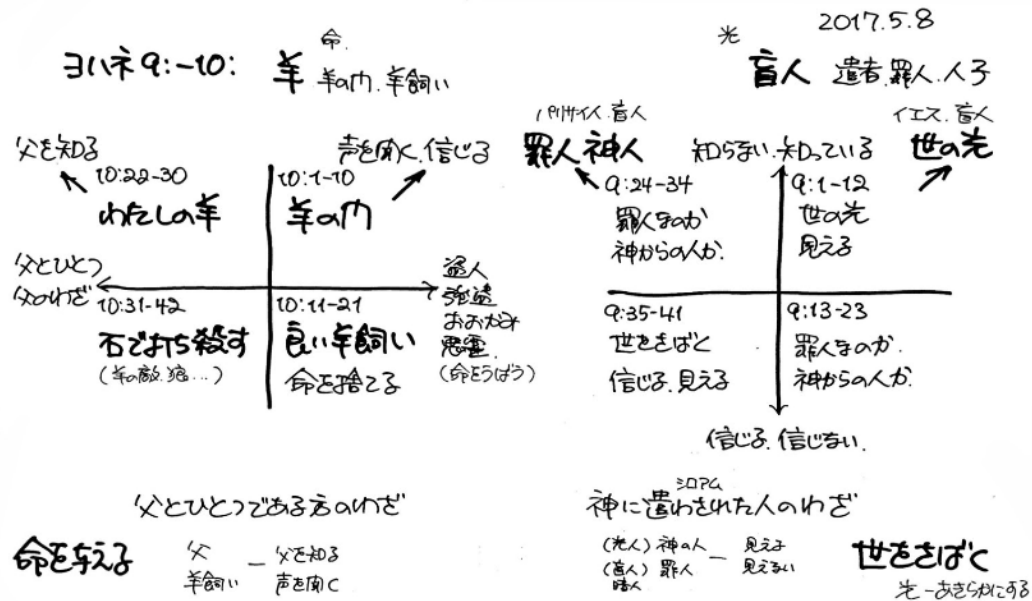




ヨハネ福音書9-10章



ヨハネ福音書の分析をしています。9章から10章。8章までのところが、仮庵の祭りの話の続きだったと思います。11章はラザロの復活の話になります。その間のところですね。9章1節から「道を通っておられる時に」というところです。9章全体が盲人の癒しというのがずっと続いています。それで10章は皆さんがよく知っている「私は羊の門です、良い牧者です」というのが、10章全体ということです。盲人の話と羊の話。これが両方ともセットで教えられている段落になっているということが分かります。で、それを見てみましょう。

まず、9章の方は、世の光というところから始まったりするのですが、並行しているところがあります。真ん中にパリサイ人が文句を言うところがあります。「世の光です」というのと「罪人なのか神からの人なのか」ということが、全体で、この外側が、世を裁くものである。見える、信じる、見える、見えないというようなことと、罪人なのか、盲人を癒せる人は罪人なのか、いや神からの人なのかということが、ここにクロスしています。

盲人と言っている人は、この「シロアムの池つかわされた者の意味」という風にわざわざ意味が書いてあります。「わたしを遣わされた方のわざ、遣わされた者の池」、神様から遣わされた者なのかどうかということが、見えているかどうか。「神から遣わされた世の光」。世の光と言っているのは、世をさばく。光ですから、明らかにする。光が来たら全部暴露されちゃうという世をさばくというもの。それと目に光がないのが

盲人なのですね。盲人が馬鹿にされるわけでしょ。盲人が馬鹿にされるのは、この暗闇の人、罪人の象徴みたいなものだということなのだと思いますね。だから罪を犯したためにこの盲人になったのかというところから始まっていますよね。罪人なのか、光の人神の人なのかという対比。見えるのか見えないのかという、この光が本当に見えている。目に光があるかどうかということが、この盲人のところで言われていることですね。「知っている、知らない、信じる、信じない」これも並行しているところに見えていと思います。まずその遣わされた者、人の子であるイエス様は人の子であるというのが、こちらの「さばくために来た」という方が盲人の段落です。

それで話が終わっているわけじゃなくて10章のところでは、羊飼い、羊の門、羊たちの話をずっと話します。この中で良い牧者だということと、この4つの段落で、「羊飼いです、羊飼い、羊の門です、あなた方は羊です」というような話と一緒に、ここに「父」がたくさん出ていますね。「父を知っている、父から授かったさだめ、父の名、父がくださったもの、私と父はひとつです、父の御手、父のわざ、父が私におり、父におることを知っている」ということで、羊の話と父の話というのがこの段落にたくさん出ています。羊、羊飼い、羊というのは、ここの3つの段落(10:1-10、10:11-21、10:22-30)にあります。最後の段落(10:31-42)には、直接羊は出てこないのですが、イエス様を石で打ち殺そうとしているというところは、羊を奪いにくる、盗人強盗、狼は石で撃ち殺すというものですから、イエス様を羊飼いじゃなくて、この敵側だとこの人たちは言っている。行動をしていると。わざを信じない者たちはやっているということ、全体としては羊のものです。

羊飼いのところで、真ん中のところは、命を捨てる、永遠の命を与えるというようなことがあります。それと、声を聞く、信じる。声を聞くことと、父に父を信じることが、私を信じるかということが、知ることと聞くことが、信仰を持つということが共通しているものとして言われているようですね。ですから、私は良い牧者ですと言って声を聞くというところも、私を信じなさいという話ではなくて、私が良い牧者なのは父が私を知っておられ私が父を知っているのと同じであるというふうに、私は良い牧者ですと言っていることを話するように、良い牧者だと言っていることは、私は父のようなものですよ、父とひとつですよということを言う言い方だというのは、こういうところから分かると思います。父は命を捨てるので、それを得ることができるというように言っているところですね。父を知っている。父を知っていることと、命という話が、この中で共通しているものとして出てきます。

この盲人の話(9章)と、羊・羊飼い・羊の門の話(10章)が、ヨハネ全体の中でどういう位置づけになっているかは、また別に考えることになりますけれども、盲人の方は、世の光、世を裁くために来ました。羊の方の話は、父と私は一つであるということで、その命を与える、父を知る、神を知る、命を与えるものとしてのイエスキリストということが、この2つですね。「神に遣わされた人のわざ」「父とひとつである方のわざ」ということで、世の光として来た。さばくために来た。命を与えるものとして来たという、この2つが、この盲人と羊の段落の大きな枠組みになっているのではないかと考えています。